

## パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XXIV)

竹 下 春 日

### 24°《表徴としての律法》

既出の21°《永続性》および22°《モーセの証拠》の両章において、主として聖書の記述内容の外的史実性が客観的に証明された。しかしその内面的信仰の核心を成すメシア来臨の事実にかんする証明は、21°章中において、極めて概略的に行われたに過ぎなかった（同章中の〔Ⅱ〕の(一)・(二)参照）。このメシア信仰の正しさに関する証明を、聖書に対する象徴主義的解釈を通じて、特に諸々の《預言》の内面的意義を開示することによって、一段と深化確立することが、実に本章および以下の諸章の任務に外ならないのである。

〔Ⅰ〕 表徴（象徴）の意味について。——本章の内容を理解するには、先づパスカルの所謂《表徴》 figure なるものの意味を知らねばならない。パスカルは、この語義について特に規定を与えているわけではないが、彼の種々述べているところから、われわれは推理総合して、この語の意味を知ることは、可能である。(一)断章 La. 494-Br. 678 で、彼は次のごとく書いている——《律法と供え物とが実物であるか表徴であるかを知るには、云々》と。パスカルの見解からすれば、律法及び供え物の二者はもちろん《表徴》であるのである。このことは、《表徴としての律法》 Loi figurative なる章名からしても、確言しうるところである。(二)続いて彼は、次のことを述べている——《預言者たちがそれらのこと〔律法と供え物〕を語るにあたって、彼らの見解と思想とをそれらに限り、ただあの古い契約のみをそこに認めたか、それとも彼らがそこに

他の何ものかを認め、この古い契約をその何ものかの写し絵であるとしたかどうかを、見きわめなければならない。肖像のうちには表徴の主体が見えるからである。》この引用文中の《あの古い契約》 *cette ancienne alliance* とは、言う迄もなく旧約聖書中の聖約を指すものであり、そして《他の何ものか》 *quelque autre chose* とは、新約聖書を暗示するものである。而して《この古い契約をその何ものかの写し絵であるとした……》…… *quelque autre chose dont elle [cette ancienne alliance] fût la peinture* という叙述から、われわれは、《古い契約》が《何ものか》である「新約」の《写し絵》であり、そしてこの写し絵が《律法と供え物》において《認め》られる事態を、知りうるのである。以上が、「律法及び供え物が表徴である」ということの実情である。即ち律法と供え物は、旧約を介して究極の真実たる新約を反映するのであり、したがって表徴とは、一般には「究極の真実を反映志向する役割を持つ事物」と規定しうるであろう。

扱て『パンセ』中には、《旧約聖書は符号（暗号）である。》 (La. 510-Br. 691) というパスカルの言葉が存する。この文中の《符号（暗号）》 *chiffre* とは、如何なるものであり、《表徴（象徴）》 *figure* と如何なる関係を有するものであろうか。fr. La. 494-Br. 678 中には、次の叙述が見出される——《符号は二重の意味を持つ。人が書面を手に入れて、そこに明らかな意味を認めながらも、その意味が蔽われ不明瞭にされ、いわば隠されているので、その手紙を見ても見えず、分っても会得していない場合、そこには二重の意味を持つ符号があると考えるほか、何を考えうるであろうか。》この引用文により、われわれは《符号》なるものが、《二重の意味》 *deux sens* を有することを知るのであるが、この二重の意味とは、一つは《明らかな意味》 *un sens clair* であり、他は《蔽われ、不明瞭にされた》 *voilé et obscurci* 意味である。即ち暗号（符号）は、——パスカルの別言によれば——《文字通りの意味》 *le sens littéral* と《隠れた意味》 *le sens caché* との二義を有するのである (La. 494)。

以上述べて来た《表徴》と《符号》の二者を比較するとき、われわれは明ら

かに両者の相似的平行関係を発見しうるのである。すなわち上例に即して対比すると、表徴——旧約——新約と、符号——文字通りの意味——隠された意味との対応が、明瞭になるのである。なぜかかる類似的対応関係が、存するのであろうか。既述の通り、「律法は表徴である」。而して旧約聖書は、この律法を記載していることは、言うまでもない。即ち聖書は、表徴の言語化・文字化したものを含むものということに成る。ところでパスカルは、次の如く断言する——《すべて愛にまでいたらぬものは表徴である。／聖書の唯一の目的は愛である。／すべてこの唯一のさいわいにまでいたらぬものは表徴である。なぜなら、目的は一つしかないのであるから、すべての確なことばでそれを示さないものは表徴だからである。》 (La. 504-Br. 670)。この引用文中の《聖書の唯一の目的は愛である。》 L'unique objet de l'Écriture est la charité. により、聖書が《唯一の目的》を目指すもの即ち「究極の真実を反映志向する役割を持つ事物」（前述の表徴の規定）の一種であることを、知りうるのである。それゆえ旧約聖書とは、表徴を言語化・文字化したところの、それ自身《表徴》に外ならぬところのものであり、したがって《符号》である旧約聖書なるものは、《表徴》の一種であるということになる。言い換えれば、《符号》とは、一種の《表徴》であって、これに属するものと言いうるのである。パスカルの説く表徴の領域は広大であって、抽象物のみならず具体的事物を含むものである。次の断章は、これを示している——《表徴。／預言者たちは、帯、ひげ、焼けた髪の毛などの表徴によって預言した。》 (La. 482-Br. 653)、《さらに恩恵すらも栄光の表徴にほかならない。なぜなら、それは究極の目的ではないからである。それは律法によって表徴され、それ自身また〔栄光〕を表徴する。……》 (La. 509-Br. 643)。

扱われわれは直前の La. 482 により、恩恵が栄光の表徴であること、次に恩恵は律法によって表徴されていること、こうしたことを理解するのであるが、これを図式化すると、律法→恩恵→栄光となる。しかし先述のごとく律法も表徴であるから、これは表徴（恩恵）の表徴ということにより、われわれは茲に表徴の成層的構造を見出しうるのである。以上の叙述全体により、われわ

れはパスカルの所謂《表徴》なるものの意味と性格とを、簡略乍ら概観しえたのである。

〔Ⅱ〕 聖書の象徴主義的解釈について—— (一) 象徴主義的解釈の必要性——  
 《矛盾。／われわれのすべての相反するものを一致させないかぎり、りっぱな人間像をつくることはできない。また相反するものを一致させずに、一致している性質の系列に従うだけでも、不十分である。ある著者の意味するところを理解するには、あらゆる相反する章句を一致させなければならない。／それゆえに、聖書を理解するにも、あらゆる章句がそこで一致するような一つの意味をとらえなければならない。いくつかの一致する章句を解くのに好都合な一つの意味をとらえるだけでは、不十分である。相反する章句さえも一致させる一つの意味をとらえることが必要である。……》 (La. 491-Br. 684), 《聖書の意味を解明しようとして、その意味を聖書から引き出さない人は、聖書の敵である。……》 (La. 485-Br. 900)。La. 491 中の《相反する章句さえも一致させる一つの意味をとらえる》 avoir un [sens] qui accorde les passages même contraires 方法こそ、聖書の章句を《暗号 (符号)》 chiffre として解かんとする仕方——象徴主義的解釈の方法に外ならない。なぜなら、聖書の相反する章句は二個の表徴であり、〔Ⅰ〕において述べられた表徴の成層構造が、この二つの表徴を成立せしめるより深い表徴の存在、ないし究極の真実を志向する最も深遠なる意義としての表徴の存在を、少くともその可能性を保証しているからである。それゆえパスカルの立場に立つとき、聖書の意味解明を怠るべきではないのである。

(二) 象徴主義的解釈の妥当性を示す実例——《主が選ばれた場所であるエルサレム以外の地で、供え物をささげることは許されず、十分の一の捧げ物を食することさえ禁じられていた。『申命記』十二章五節など、……／ホセアは預言して、彼らは王なく、君なく、供え物なく、偶像なきにいたるであろうと、言った。これはエルサレム以外の地で正式の供え物をすることができない今日、成就したわけである。》 (La. 492-Br. 728)。この断章は、『申命記』中に記されたモーセの戒言に基づいて、ホセアが行った預言の内容が、実現成就された

ことを、述べたものである。ところでモーセの戒言及び預言なるものは、すべて《表徴》であり、《今日、成就された》状態こそは、表徴の志向する「真理」の内容に外ならないのである。こうしてモーセの言葉を、一種の表徴と解したホセアの預言の正当性が、証明されたのである。それゆえこの事実は、象徴主義的解釈法の妥当性を証することにより、同解釈法にかんする既述の必要性を、一段と強固に確定するものである。かようにその必要性和妥当性を保証せられた象徴主義的解釈方法を適用して、パスカルは旧約・新約の両聖書の内容に、整合的統一性を与え、諸々の預言を媒介として、史的イエスがメシアであり、神の子であることを証明せんとしているのである。

(三)章句にかんする誤った解釈——La. 486-Br. 648, La. 488-Br. 649, La. 521-Br. 646 (245)。このうち La. 486 のみを掲げると、次の如くである——《二つの誤り。1°すべてを字義的に解すること。2°すべてを精神的に解すること。》

〔Ⅲ〕 符号 (暗号) chiffres としての聖書。——(一)聖書は符号である——(a)聖書の上に置かれたヴェール (La. 514-Br. 676 (239))。 (b)両義性と旧約聖書の符号性 (La. 510-Br. 691)。 (c)新約における符号を解く鍵 (La. 483-Br. 681)。 (d)新約・旧約両聖書の相違と連関 (La. 527-Br. 666 (252))。これらのうち重要な二断章 (c・d) を掲げると——《表徴的なるもの。／符号をとく鍵。／「真の礼拝者」——「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」》 (La. 483), 《旧約聖書は来世の喜びの表徴を含んでいたが、新約はそれに到達する方法を含んでいる。／表徴は喜びであり、方法は悔悛であった。とはいえ、過越の小羊は「苦菜をそえて」食べた。／「私はひとりで、のがれるであろう」イエス・キリストは、死ぬ前には、ほとんどただひとりの殉教者であった。》 (La. 527)。

(二)符号としての章句の特徴——(a)章句の相反・矛盾 (La. 491-Br. 684, La. 493-Br. 685, La. 497-Br. 686)。章句の相反性の典型的实例を、われわれは La. 497 において、看取することができる——《相反。／メシアまでつづく王権。王もなく君もない。／永遠の律法——変えられた律法。／永遠の契約——新しい契約。よい律法——わるい律法。『エゼキエル書』二十章。》 (b)字義と霊的意義 (秘義) ——La. 503-Br. 692, La. 506-Br. 687, La. 518-Br. 571 の一

部。(c)表徴と真理との関係——《「あなたは山で示された型に従って造らなければならない」/だから、ユダヤ人の宗教は、メシアの真理への類似の上に形づくられてきたし、メシアの真理は、その表徴であったユダヤ人の宗教によって、認められてきたのである。/ユダヤ人には、真理は表徴されていただけであり、天上では、それは明示される。/教会では、それは隠されており、表徴との関係において認められる。表徴は真理にもとづいてつくられた。/真理は表徴にもとづいて認められた。……》(La. 530-Br. 673 (255))。

〔IV〕 表徴の内容と実例。——(一)旧約聖書における表徴——La. 479-Br. 647. La. 480-Br. 657, La. 481-Br. 674, La. 482-Br. 653, La. 500-Br. 719, L. a501-Br. 680. La. 516-Br. 682 (241), La. 523-Br. 656 (259)。(二)新約聖書における表徴——La. 502-Br. 683, La. 534-Br. 658 (259), La. 653-Br. 778 (306)。

以上新旧両約所載の諸表徴のうち、われわれは極めて重要な意義を有する La. 523-Br. 656 を掲げて、パスカルの象徴主義的解釈理解の資とすることにし度い——《アダム「来たるべきものの型」。一方をつくるための六日、他方をつくるための六つの時代。アダムが形づくられるためにモーセがしるした六日は、イエス・キリストと教会とを形づくるための六つの時代の形象 *la peinture* にすぎない。……》

〔V〕 表徴に対するユダヤ人の無理解と、その宗教的意義。——(一)表徴にかんするユダヤ人の誤解および無理解——《肉的なユダヤ人は、彼らの預言のなかに告げられたメシアの偉大さをも卑賤をも理解しなかった。彼らは預言されたメシアの偉大さを誤解した。……彼らはメシアの偉大さが、その永遠性にあるとは信じなかった。またメシアの卑賤と死とをも、同様に誤解した。「メシアは永遠にながらえるはずなのに、この人は、私は死ぬであろうと言う」と、彼らは言った。——したがって、彼らはメシアを死ぬべきものとも、永遠なものとも信ぜず、ただ彼の肉的な偉大さのみを求めたのである。》(La. 490-Br. 662)。この fr. は、ユダヤ人の無理解を示す好例であるが、これに類する内容を示すものとして、われわれは次の諸断章を見出すことが出来る——La. 457-Br. 577 (214), La. 484-Br. 667, La. 491-Br. 670, La. 519-Br. 675 (224) の

後半, La. 522-Br. 669 (247) [XV回参照]。

(二)無理解・誤解にかんする宗教的意義について——パスカルは、ユダヤ人の表徴に対する無理解と誤解について、種々なる宗教的意義をわれわれのために展示している——La. 496-Br. 762, La. 507-Br. 745, La. 525-Br. 664 (250), La. 526-Br. 663 (251), La. 531-Br. 671 (256)。これら宗教的意義のうち、最も基本的なものは、ユダヤ人のイエス・キリスト拒否は、それ自身神の摂理によるとするものである。次の二断章は、かかる深義を、われわれに対して明瞭に示している——《表徴的なもの。／何ものも貪欲ほど愛に似たものはなく、また何ものもこれほど愛に反するものはない。そこで、貪欲を喜ばず富に満されていたユダヤ人は、キリスト者によく似ていたとともに、全く反していた。このようにして、彼らはぜひとも二つの特性、すなわち、メシアを表徴するために、彼によく似ることと、疑わしい証人であってはならないために、彼に全く反することとを持っていたのである。》(La. 526), 《表徴的なもの。／神は、ユダヤ人をイエス・キリストに仕えさせるために、彼らの邪欲を利用された。》(La. 525)。

[VI] イエス・キリストと象(表)徴。 イエス・キリストと表徴との関連については、様々の事柄がパスカルによって語られている——(一)聖書にかんするイエスの言行の啓示性 (La. 487-Br. 679)。 (二)イエスの来臨の仕方 (La. 489-Br. 758, La. 494-Br. 757)。 (三)イエスの教えた事柄 (La. 505-Br. 545)。 (四)イエスは自分自身の証拠を、前代の預言より引き出した (La. 511-Br. 794 (236))。 (五)イエスの本当の弟子とそうでない弟子との相違 (La. 528-Br. 519 (253))。 (六)イエスのわざと表徴 (La. 524-Br. 766 (249)), La. 532-Br. 665 (257))。 これらのうち、重要なものの若干を挙げると、次の如くである——《表徴。／イエス・キリストは、聖書を理解させるため、彼ら [ユダヤ人] の心を開かれた。／二大啓示とは、次のようなものである。1°あらゆることは、彼らに表徴として起こった。「真にイスラエル」, 「真に自由」, 天からの真のパン。／2°十字架にいたるまでへりくだった神。キリストは栄光に入るため苦難を受けねばならなかった。「自分の死によって死にうち勝たれた」二つの来臨。》(La.

487), 《神は、メシアを善人には認めさせ、悪人には認めさせまいとして、彼 [イエス] のことを次のように預言させられたのである。もしメシアの来臨の仕方が明らかに預言されていたら、悪人にとっても漠然としたものが無くなっていたであろう。／もしその来臨の時期が漠然と預言されていたら、善人にとっても漠然としたものがあつたであろう。……そこで、時期は明らかに預言され、仕方は表徴によって預言されたのである。……》(La. 489), 《愛は表徴的な戒めではない。イエス・キリストは表徴を取り去り、真理を立てるために来られた……》(La. 532)。

〔Ⅶ〕 表徴の存在理由。——《表徴を用いた理由。／メシアを信じさせるには、先行的な預言の存在する必要があつたし、またその預言が、疑いを受けぬ、勤勉で忠実で、非常に熱心な、しかも全地に知れわたった人々によって保存される必要があつた。／すべてこれらのことを成就するために、神はこの肉적인民族 (ユダヤ人) を選び、メシアを救い主として、またこの民族が好んでいた肉적인幸福の与え主として予告する預言を、彼らに託されたのである。……》(La. 518-Br. 571)。神が表徴 (象徴) を置いた理由は、この断章の内容を含んでいる——La. 504-Br. 670 の前半, La. 509-Br. 643, La. 512-Br. 644 (237), La. 535-Br. 654 (260)。

〔Ⅷ〕 聖約と表徴。——(一)神の愛の戒めと表徴。聖約における神への愛の戒め *précépte* と、表徴との連関を示す断章としては、次の二断章が存する——《すべて愛にまでいたらぬものは表徴である。／聖書の唯一の目的は愛である。／すべてこの唯一の目的にまでいたらぬものは表徴である。なぜなら、目的は一つしかないのであるから、すべての的確な言葉でそれを示さないものは、表徴だからである。／このようにして、神はこの愛の唯一の戒めに多様性を与え、われわれを唯一の必要なものに常に導くこの多様性によって、多様性を求めるわれわれの好奇心を満足させてくださるのである。……》(La. 504-Br. 670 の後半), 《……贖罪は紅海を徒歩で渡るようなものであらうと、イザヤは五十一章で言っている。／だから、神は、エジプトや紅海からの脱出、王たちの征服、ユナ、アブラハムの全系図などによって、神が救いを施しうること、天か



らのパンを与えうること，などを示されたのである。そういうわけで，敵国民とは，彼らの知らないメシアその人の表徴であり，形象である。／そこで，神はすべてこれらのものが表徴にすぎないこと，「真に自由」，「真のイスラエル」，「真の割礼」，「天からの真のパン」などが何であるかを，ついにわれわれに教えられた。／これらの約束 *ces promesses-là* のうちに，各人は自分の心の底にあるもの，すなわち，一時な幸福か霊的な幸福か，神か被造物かを見いだす。だが，このような相違がある。すなわち，そこに被造物を求める人は，求めるものを見いだしはするが，多くの矛盾と，それらを愛してはならないという禁制と，神のみを拝し神のみを愛せよ（これらは同じことにほかならないが）という命令とともに，それを見いだす。要するに，メシアは彼らのために来臨されたのではない。それに反して，そこに神を求める人は，なんの矛盾もなく，神のみを愛せよという戒めとともに，神を見いだす。メシアは彼らの求めている幸福を与えるために，預言された時期に来臨されたのである。》(La. 519-Br. 675 (244))。

(二)メシアの真理と表徴。 このテーマにかんしては，次の断章を再掲するのが，最も効果的である——《「あなたは山で示された型に従って造らなければならない」／だから，ユダヤ人の宗教は，メシアの真理への類似の上に形づくられてきたし，メシアの真理は，その表徴であったユダヤ人の宗教によって，認められてきたのである。／ユダヤ人には，真理は表徴されていただけであり，天上では，それは明示される。／教会では，それは隠されており，表徴との関係において認められる。／表徴は真理にもとづいてつくられた。／真理は表徴にもとづいて認められた。》(La. 530-Br. 673 (255))。真理と表徴の関係については，なお次の諸断章にあっても，多かれ少かれこれを見出すことが，可能である——La. 324-Br. 857 (176). La. 519-Br. 675 (244) の前半，La. 520-Br. 646 (245)。

以上の(一)及び(二)において伺われる，パスカルの所説の内容は，モーセの十戒中の第一戒および第二戒に照応するものである。次に既出の La. 519 中に見られる「エジプトや紅海から脱出」と連関する旧約『出エジプト記』（二十章 3

～6節)には、次の記述が見られる——「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。……わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、4代に至るであろう。」パスカルが直接引用しなかったにせよ、当然彼の念頭にあったに相違ない。この章句の主旨が(一)の大意に相当することは、明らかであろう。即ち「恵みを施して」の句は、メシアたるイエス・キリストの来臨をも象徴するものと、パスカルは恐らく見ていたのであって、これにより旧約と新約とが、首尾一貫したものと成るのである。而してかかる成果こそは、じつに象徴主義的解釈(二)の賜物とするのが彼の主意に外ならぬものと、われわれは解しうるのである。

(三)神の全智全能と表徴。——《午餐と晚餐との相違。／神にあっては、ことばと意向とは違わない、神は真実であられるから。ことばと結果とも違わない、神は大能であられるから。手段と結果とも違わない、神は賢明であられるから。……／アウグスティヌス『神の国』五卷十章。神は全能であるというこの基準は一般的である。……真理の確証のために幾人もの福音書記者たち。／有益な彼らの不一致。／最後の晚餐ののちの聖餐、表象ののちの真理。／イエスの死後四十年たって起こったエルサレムの滅亡、世界の滅亡の表徴。……》(La. 535-Br. 654 (260))。この断章は、モーセの戒めのうちに示された聖約を、全能なる神が絶対的の確実さと巧緻さとを以って実行すること、且つまた実際に実行の正確な結果が示されたことを、説くものである。この引用文中の《有益な彼らの不一致》なるものの事実と理由を、われわれはパスカルの書き残した諸断章のうちに、これを発見することが出来る——《四福音書の外見上の不一致。》(La. 595-Br. 755)、《宗教を知ることから私を最も遠ざけるように見えた、これらのあらゆる対立は、私を最も速く真の宗教に導いてくれたものである。》(La. 248-Br. 424)、《……矛盾が常に残されてきたのは、悪人を盲目にするためである。》(La. 778-Br. 902——『プロヴァンシャル』のためのノート)。

次に《最後の晚餐ののちの聖餐、表徴ののちの真理。》における《聖餐(聖体秘蹟)》Eucharistie とは、『マルコ伝』(十四章十——二六節) 中に見ら

れる、かの有名なイエス・キリストによる弟子達へのパン（キリストの肉）とブドウ酒（キリストの血）——全質変化による聖体——の分与を指すものであり、神の子の受難（贖罪）及び信仰者の象徴たる弟子たちへの祝福という神意の正体（神の愛）を告げるものであって、《表徴ののちの真理》 *vérité après figure* を、示すものに外ならないのである——《愛は表徴的な戒めではない。イエス・キリストは表徴を取り去り、真理を立てるために来られたのだ……》 (La. 532-Br. 665)。

扱て今われわれが問題としている、La. 535 中の《イエスの死後四十年たって起こったエルサレムの滅亡、世界の滅亡の表徴。》とは、イエス・キリストを無視したユダヤ人に対する神の刑罰であり、且つこれによって、神は全世界（被造物）を破滅せしめ得るといふ威力の持ち主であることを、意味しているのである。

最後に、該断章の冒頭における《午餐と晚餐との相違。》 *Différence entre le dîner et le souper*. について、『パンセ』の諸版の註は、『ルカ伝』十四章十二節を指示しているが、同章（十二——十四節）の記述を引用すると、次の如くである——「また、イエスは自分を招いた人に言われた、『午餐または晚餐の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持の隣りの人などは呼ばぬがよい。恐らく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けることになるから [以上十二節]。むしろ宴会を催す場合には、貧乏人、不具者、足なえ、盲人などを招くがよい [以上十三節]。そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際には、あなたは報いられるであろう。』 [以上十四節]」。この引用文の示すごとく、イエスは「午餐または晚餐」と語り、《午餐と晚餐との相違》については、触れていない。また、引用文全体に徴しても、午餐と晚餐との相違にかんするものは、文字通りにせよ象徴的意味においてにせよ、これを見出し難い。それゆえ諸版の註の指示するところは、適切ではない。われわれは、《晚餐》 *le souper* をイエス・キリストの「最後の晚餐」（聖餐を含む広義のもの）と解し、《午餐》 *le dîner* を、晚餐の行われた当日（除酵祭の第1日）の午餐と解すべきもの

と、考える。即ち午餐におけるイエスは人間(神人における)としてのイエス・キリストであり、晚餐におけるイエスは神の子としてのイエス・キリストである。前者は象徴としてのメシアであり、後者は《表徴を取り去り、真理を立てるために来られた》神としてのメシアである。それゆえ、《午餐》はメシアの表徴的行為であり、《晚餐》はメシアの真理確立のための行為であると、解するのが妥当であると言えよう。かくして《午餐と晚餐との相違》は、大略表(象)徴と真理との相違に相当するのである。

かようにして(≡)全体により、パスカルは、全能なる神による確約とその履行の絶対的确实性とを、神学的面から説くことにより、旧約と新約との内面的統一性を保証しようとしたのである。

〔IX〕 旧約と新約とを一度に証明すること。——《旧約と新約とを一度に証明すること。／これらの二つを一気に証明するには、一方の預言が他方において成就しているかどうかを見さえすればよい。もし人がそれらに一つの意味しか認めなければ、メシアが来臨しないことは確かであるが、それらに二重の意味があるとすれば、メシアがイエス・キリストとして来臨することは確かである。／だから、あらゆる問題は、預言に二重の意味があるかどうかを知ることにかかっている。／聖書にイエス・キリストと使徒たちとが与えた二重の意味があることは、以下によって証明される。／1°聖書自身による証明。／2°ラビ〔ユダヤの律法学者〕たちによる証明。……／3°カバラ〔旧約についての伝説〕による証明。／4°ラビたち自身が聖書に与える神秘的解釈による証明。／5°ラビたちの原理による証明。……》(La. 508-Br. 642)。

上の引用文に見られるように、《旧約と新約とを一度に証明する》*prouver tout d'un coup les deux* ためには、二つの条件を満たすことが、必要である。即ち、(一)《一方〔旧約〕の預言が他方〔新約〕において成就している》こと、及び(二)預言が《二重の意味》*deux sens* を持っていること、この両者を証明する要が存するのである。このうち、(二)に就いては本章の〔II〕の(一)および〔III〕・〔IV〕において、証明(特に1°の《聖書自身による証明》)の地盤が既を用意せられている。それゆえパスカルとしては、(一)にかんする証明の準備を、

来たるべき27°《預言》の章において行っているのである。

〈補説〉——われわれは、Ⅷの(㊦)において、La. 535 中の《午餐と晚餐との相違。》を、「大略表徴と真理との相違に相当するものである。」とした。他方、同断章中の《最後の晚餐ののちの聖餐、表徴ののちの真理。》に徴するとき、最後の晚餐は聖餐と対立せしめられ、《表徴》に相当するものとされている。前者の場合、われわれは《午餐》に対立する《晚餐》なるものを広義に解し、聖餐を含む最後の晚餐と解釈したが、パスカルによって《表徴》とされている最後の晚餐を、《真理》に相当するものと解釈することは、不整合ではあるまいか、という疑問が生じうる。パスカルの所謂《最後の晚餐》*la Cène* とは、《聖餐》を除いた部分であり、狭義の最後の晚餐と言いうるものである。確かに狭義の最後の晚餐は表徴であるが、《午餐》としての表徴とは、真理との関係において差異あるものである。即ち狭義の最後の晚餐中には、かの高名なるユダの背信にかんするイエスの言葉が語られており、これが重要な意味を有しているのである。すでにユダのみならず、一般に悪しきユダヤ人たちが、神の計画的預言のうちに入っていたのである。次の二断章は、これを裏書している——《神は、メシアを善人には認めさせ、悪人には認めさせまいとして、彼のことを次のように預言させられたのである。……》(La. 489-Br. 758), 《ユダヤ人は、彼のメシアであることを認めまいとして、彼を殺したことにより、彼にメシアの決定的証拠を与えた。／また彼を否認しつづけることにより、彼らはみずから申し分のない証人となった。そして、彼を殺し、彼を拒みつづけて、預言を成就させた (『イザヤ書』60章, 『詩篇』71篇)。》(La. 663-Br. 761——強調点は論者)。

かようにして、パスカルの立場よりすれば、ユダの裏切りは、《真理》確立(神の愛の実現としての聖餐、贖罪等)を成就せしめるための効果的手段(神による)であり、《真理》と深く係わるところの極めて意義深き《表徴》である。かように狭義の最後の晚餐は、《表徴》であるとはいえ、真理確立と不可分の関係にあり、《午餐》とは意義上大差ある表徴である。したがって広義の

最後の晩餐なるものは、《真理》と時間上本質上密接なる関係を有する狭義の最後の晩餐と、《真理》そのものとの両者を含むのであって、——真理との係わりのより浅い表徴たる《午餐》と比べるとき——この広義の最後の晩餐なるものは、全体として《真理》に相当するものと言いうるであろう。われわれが(白)において、「《午餐と晩餐との相違》は、大略表徴と真理との相違に相当するものである。」と述べたのも、実にかかる意味においてである。

われわれは以下次の事を附言しておき度い。(1)狭義の最後の晩餐たる《表徴》と、《午餐》なる《表徴》との本質的意義の深淺は、[I]において触れられた「表徴の成層的構造」に照応する事実を外ならないということ。(2)われわれは、広義の最後の晩餐を、《聖餐》を含む晩餐と解し、これを狭義の最後の晩餐と区別したが、パスカルは前者を《le souper》と呼び、後者を《la Cène》と称して、言語上区別している。こうしたパスカル自身による用語の差異こそは、われわれの解釈を支持するものと、言えよう。(3)《午餐と晩餐との相違。》と、これに続く《神にあっては、ことばと意向とは違わない》以下の文章との内容的連関は、一見したところ不明である。然しわれわれの解釈の立場からすれば、両者の連関の発見は決して困難ではない。例えば、《ことばと結果とも違わない、神は大能であられるから。》は、ユダの背信にかんするイエスの言葉とその適中の事実に照応し、またユダの裏切りが、——神の立場から見るとき——キリストの受難実現のための《手段》となって、キリスト贖罪という《結果》をもたらした事柄は、《手段と結果とも違わない、神は賢明であられるから。》ということの一例に外ならない。以上により、われわれは La. 535 中の冒頭の語句と、これに続く文章との内容的連関を把握しえたのである。

(XXIV 回了)